

第14回「京都御苑ずきの御近所さん」

京菓匠 株式会社 笹屋伊織
取締役 女将

田丸 みゆき 様



■京菓子の「女将」のお仕事について、教えてください。

京都では、お料理屋さんや旅館では「女将さん」と呼びますが、お菓子屋さんの場合は一般的に「女将」とは言わず「奥さん」と言います。意外ですが京菓子の世界は男性社会であって、奥さんが公の場に出る場面というのは全くありません。

そうした中で、京菓子屋・笹屋伊織にお嫁にまいりまして、私の最初の仕事はお店に来られるお客さまの接客をはじめ、若い従業員に接客マナーを教えるのがメインでした。まだまだ規模が小さいので、お菓子の袋詰めをしたり、営業や配達、集金など何でもやってきましたが、表立って何かをするということではなく、今も会社の中では「若奥さん」とか「奥さん」と呼ばれています。

私は、大阪からお嫁にくるまでは、京都のこともお菓子のことも、あまり知りませんでした。仕事をしていて、こういう時にはこのお菓子を食えると決まっていたり、特別な意味が込められていたりして、お菓子のことを知れば知る程、奥が深く面白いと思うようになりました。私自身がお菓子の興味を持ってきた頃に、修学旅行生の体験学習の依頼があり、受け入れるようになりました。

昔と違って今の修学旅行生はグループに分かれ、いろいろなお店を訪問します。修学旅行生に質問されて答えていくうちに、自然と勉強になり、お菓子のことやお店のことなどをもっと多くの人に発信していきたいと思いはじめようになりました。そうしたことから、社内報をつくることにしたんです。

うちは、北は北海道から南は九州までデパートに出店してしまっていて、自社の社員を置いていません。ただ、なかなか普段は電話のやり取りぐらいで直接会うことができないですし、遠方の社員は京都のことをあまり知りません。お菓子のことや京都のことを、まずは社員に知ってもらいたいと思って、当時まだパソコンではなくてワープロで打ったものに写真を貼り付けた手づくりの社内報を各店舗に送っていました。でも、子どもを3人出産したこともあって、忙しくて社内報を継続できなかったんです。子育てに余裕が持てるようになり、社内報をまた続けたいなと思っていました。その頃、インターネットが普及し始めたので、笹屋伊織もホームページを開きました。その中に「女将の部屋」というページをつくって、お菓子や京都のことを発信したら、うちの遠方の社員も私がいちいち手づくりの社内報を送らなくても見たい時に見ることができます。社内向けに発信することを一番の目的に「女将の部屋」をつくらうと思ったんです。

私がいつも心にかけていることなのですが、大阪から老舗のお店にお嫁に来て、私の振る舞い、ちょっとした発言や行動で暖簾の価値を下げてしまったり、今まで守ってきたものを崩してしまったり、御先祖様にとっても申し訳ないことです。崩れるのは早いですから、暖簾の価値を下げることになることだけは何とか避けたいと思っていました。京菓子の世界で奥さんのことを女将と呼ばないのに自分で「女将」と名乗って、表に出ないものなのに顔写真まで出してホームページに載るといのは老舗のお菓子屋としてはどうなんだろうと正直悩みました。主人に「発信したい」という気持ちとお店の看板についての心配事を相談したところ、主人は革新的な人なので賛成してくれました。しかも私の負けず嫌いをくすくすするのが上手いんです。

主人から、「周囲の目を気にして、自分の志をあきらめて、それで他所の老舗の和菓子屋の奥さんが同じようなことをやったらどうする？」と言われたんです。私がずっとやろうと思っていたことを、他所の和菓子屋の奥さんがもし先に「女将」と名乗ってホームページをつくって、その後で私がやっても真似をしたことになるから「それは嫌や」って言ったんです。主人は「そう思うのやったら先にやったらいい。何でも一番にすることに価値がある。出る杭は打たれるって言うけど、打たれて痛くって仕方がなかったら止めたらい」と言ってくれました。インターネットなんて、消したらしまいやからって。その言葉でスッと楽になったのと、やっぱり伝えていきたいという思いが強かったので、ホームページの立ち上げと同時に「女将の部屋」を始めたんです。

そこから最初は修学旅行生が来たらお話をして、毎月ちょっとずつ京都のことやお菓子のこと、例えば柏餅は何で食べるんやというようなことをホームページの中で更新していたんですけども、そのうち少しずつ講演のお話を頂くようになって、本当に少しずつ、本来は外に出ない和菓子屋の奥さんが、女将として外に出ていくようになったのです。

■笹屋伊織が京都でお店を出されたきっかけやお店の歴史などをお教えてください。

創業は 1716 年の徳川吉宗の享保の時代です。初代は伊勢から来たと言い伝えられています。伊勢の近くに玉城町という町があり、そこに田丸城というお城があつて、日本全国の田丸という姓はその町の出身だとも言われています。うちの先祖もその辺りで和菓子屋をやっていたのが腕を見込まれて京都に呼ばれたのではなかろうかというふうに言い伝えられているのですが、その辺は 300 年前の話ですからね。

今の店舗は七条大宮ですが、創業の地は七条堀川の辺りです。うちに古いもので 200 年くらい前の「^{ほかい}行器」という御所にお菓子を納めるための通い箱があるのですが、そこに書かれている住所は七条堀川とあります。

創業当初から京都御所や神社仏閣の御用を務めさせて頂いてまして、今もそのまま御用をさせて頂いているところもあります。

うちを含め、江戸時代の中期に御所の御用をしていた上菓子屋というのが 28 軒ありました。江戸が終わって明治になりました時に、宮中御用達の各業者さんが天皇陛下とともに店ごと東京に移りました。上菓子屋では「とらや」さんが、天皇家とともに東京へ行かれました。

その後、京都に残った 27 軒が、お公家さんや神社、お寺、お家元の御用をして、現在に至ります。ちなみに、その 27 軒が前身となって設立されたのが、現在の「菓匠会」（19 軒）です。もっとも、明治以降に創業した店もありますので、菓匠会の内、宮中御用達の頃から続く店は半分くらいです。

綿々とした歴史の中でこのようにお商売をさせて頂けて、とても幸せなことだなんて思います。また、有難いことに新しい取り組みも実を結んでおりまして、「IORI カフェ」も 1 号店を大丸京都店に出させて頂いて 13 年、名古屋の名鉄百貨店で丸 10 年を迎えました。まあ、まだ若い店ですけどね。

■昨年、『創業三〇〇年老舗京菓匠女将にならう愛される所作』をご出版されました。出版のきっかけやこの本に込められた女将の思いなど聞かせてください。

元々、本を出したいと思っていた訳ではありませんでした。ある日突然、東京の出版社の方から「所作に関する本を出版したいので、書いてもらえますか？」とお電話を頂いたんです。私もびっくりして、何で私なのと思いました。私は、マナーの先生でも礼法の家元でもないですし。

よく元キャビンアテンダントの方がマナーの本を出したりされていますけど、何で和菓子屋の女将に話が来たのだろうって、ものすごく不思議だったんです。

直ぐに東京から編集者の方が、挨拶に来られました。それで、何故私なんですかって聞きましたら、いわゆる礼法の先生やマナースクールの先生などの本はたくさん出ているけれど、その辺りのマナーの本を読む方はある程度アッパーレベルであって、マナーをきちんとされている方が、さらにステップアップ、もしくは確認のために読むような感じで、出したい本はそういうのではなく、今の若いお嬢さんが、おじいちゃんやおばあちゃんと一緒に暮らさなくなり、所作やマナーをあまり教えてもらえなくなったため、平気で地べたに座ったり、電車の中で化粧したり、歩きながら物を食べたりという、そういったくらいの女の子たちが読んで、ハッと気づくような、少しハードルを下げたものを出したいと思っているということでした。そこで私のホームページを見たら、いろんな講演活動や社員教育もされていて、普段から若い女の子たちを教えているだろうから、そういったことを書いて欲しいって言われたんです。

それで「ああ、それだったら書けそう」と思いました。形の綺麗なきっちりした所作といわれると自信はないけど、私が常日頃、うちの従業員などに教えていることで良ければお役に立てるかもしれないなと思ってお引き受けしました。

この本に込めた思いというのは、所作というどうしても「形」と思ってしまいがちですが、そうではなく、形よりも「心」だということを書いています。品格や上品と言われるものは、DNAや運動神経、頭の良さといった素質とは違うものと思います。産まれた時から上品な赤ちゃんなんていませんからね。

それと環境も関係ないと思います。ある程度は関わってくるでしょうけど、一番は本人の心持ちだと思うんです。例えばおうちのお母さんがだらしなかったとして、「自分はこうなりたくない、自分はちゃんとしたい」と思って、普段から気をつければ品格は身に付きます。習慣なんです。なので、よく「うちの家はそんな家じゃないから」とか、周りや親のせいにする人がいますが、そうではなくて自分が思ったら、今日から始めたら、心持ち次第で美しい所作ができると思います。

出版後の反響は、お蔭様で講演や取材をたくさん頂くようになりました。先日も、秘書を育てる教育機関の本に私のインタビューを載せたいと取材に来られました。今まではお菓子のことが多かったのが、所作の方にスライドしています。あとはテレビやメディアのお話を頂くようにもなりました。思った以上に反響があって、本の出版ってすごいことだなんて、全国どこへ行っても本は置いていますからね。本当に有難いと思います。

■女将の今後の抱負を聞かせください。

抱負は、特に私自身に対してはないですね。「よく女将さんの夢は？」と聞かれるんですけど、別にすごい野望を持っている訳ではないんです。

私はいつも御依頼頂いたことに対して、自分が背伸びせず、等身大でできる限りを一生懸命、求められることにお応えしていきたいと思っているだけで、特に今後の抱負っていうものないんです。

私にとって一番はなんといっても笹屋伊織が大事です。私が本を出版したり講演したりすることも、すべては笹屋伊織とうちに勤めてくれている従業員さんたちに返ってきたらいいなと思っています。お客様にとっても働いてくれている人にとっても、笹屋伊織がいいお店であつたらいいなっていうのが一番の願いですね。

■女将の思い出の中で、京都御苑にまつわるものはありますか。

うちは子どもが男の子 1 人と女の子 2 人いますが、仕事が忙しかったので、お休みの日にどこか遠くに連れて行ってあげることがなかったんです。でも京都御苑は自転車で行ける距離なので、子どもが小さい時はよく近くの図書館で本を借りて、子どもたちと京都御苑に行ってシートを敷いてそこでサンドイッチを食べながら本を読むといった、とてものんびりした過ごし方をしていました。本当に京都御苑って入ってしまうと別世界で、時間がゆっくり流れているような空気の違いを感じます。

それから息子が少年野球をしていましたので、試合があれば、御苑のグラウンドまで応援に行ったりしました。

息子とは野球の試合の応援だったり、娘とはピクニックをしたり、子どもたちと過ごした思い出の場所です。

■京都御苑で好きな場所、好きな時期などありますか。

新緑の頃ですね。よく桜の頃、という方も多いと思うんですけど、桜の時期はお店が忙しいのでなかなかゆっくりできません。うちは5月のゴールデンウィーク明けからお中元が始まるまでが結構ゆっくりできて、気候もいいので好きですね。

京菓子屋には閑散期が年に何回かあって、まず5月のゴールデンウィーク明けから6月の梅雨の走りまでです。その後は8月のお盆明けから9月の始めくらいまでと、1月のお正月が明けて松の内が終わってから2月の節分くらいまでです。ちょうど5月の新緑の頃に子どもたちと御苑に出掛けた思い出があります。

■京都御苑の今後について、ご意見などご自由におっしゃってください。

やはり、京都御苑は今のまま残してもら方がいいかなと思います。先日、大分県の湯布院に行きましたが、お土産物売っている通りが、どこにでもあるような、別に湯布院じゃなくてもいいんじゃないかという風景になってしまっていたんです。それは京都の錦市場なんかと同じで、京の台所と呼ばれていたのはいつの時代かというくらいに、売っている物がバームクーヘンやプリン、唐揚げなどどこでも一緒ですよ。

そういう時代のなかで、京都御苑でいろいろイベントを開催したり、屋台とかが出るようになったらそれは寂しいと思います。あそこは侵されない空間であってほしいし、あんまり観光地化されて欲しくないと思います。京都人の憩いの場所というのか、いつでも誰でも入れるところで、だけど特に何かがある訳でもないというのが大事ではないでしょうか。やはり、これまでの文化であるとか自然だとかは守ってほしいなと思います。

2017年3月1日 インタビュー
聞き手：田村省二，山本昌世

○田丸みゆきさま プロフィール○

大阪府出身。帝塚山学院短期大学英文学科卒業後、野村證券株式会社に入社。その後、中学校の講師を経て京菓子の老舗（創業 1716 年）「笹屋伊織」の十代目に嫁ぐ。経営や社員教育、イオリカフェのプロデュースに携わる。その傍ら女将として培った経験を活かした、各種団体・企業・教育機関への、京菓子文化、おもてなし、和のセミナーなどの研修・講演が好評。年間 80 本を超える。京菓匠 笹屋伊織 取締役十代目女将、株式会社イオリ・コーポレーション 取締役社長、京都御幸流華道教授、京都観光おもてなし大使などを務める。著書に『創業三〇〇年老舗京菓匠女将にならう愛される所作』（主婦と生活社）がある。